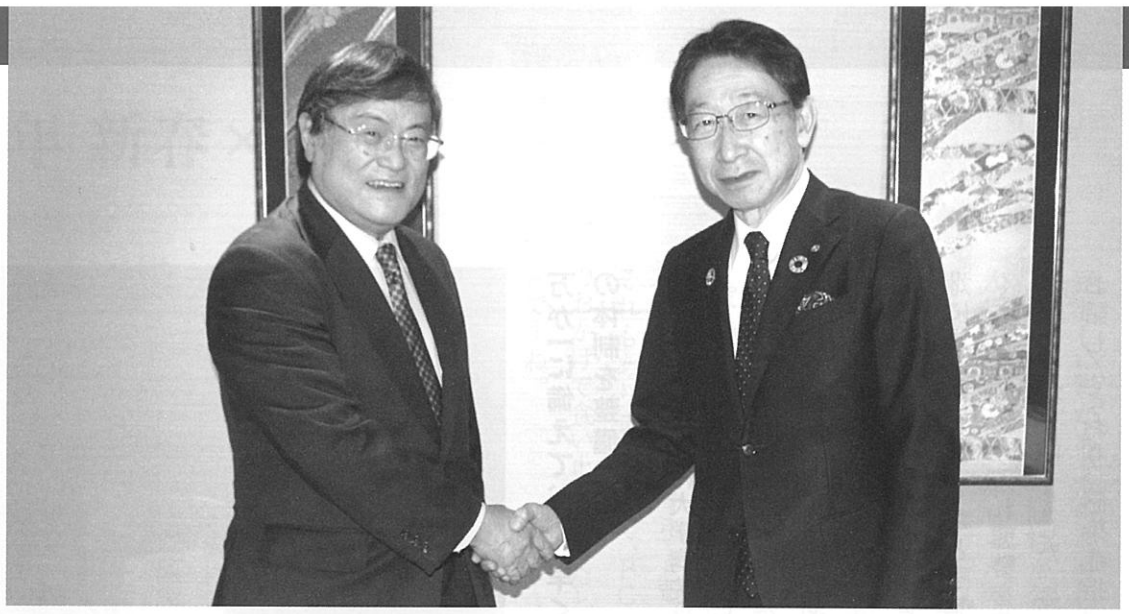


2021年 新春×対談

島田 眞路　　進藤 中

国立大学法人山梨大学 学長　　甲府商工会議所 会頭

2021年を迎えるにあたり、進藤会頭との対談に臨んでくださったのは、医療の立場で山梨県の新型コロナウイルス対策に尽力されている、山梨大学の島田眞路学長（当所顧問）です。年頭にあたり、昨年を振り返りながら、これからどのような方向を目指すべきかお二人に語っていただきました。

進藤会頭　あけましておめでとうございます。新しい年がスタートしました。昨年は、年明け早々から新型コロナウイルス（以後 新型コロナ）が世界中に拡散し、ヒト・モノ・カネの移動が大幅に制限されました。その結果、リーマンショックを超える極めて厳しい経済情勢に陥り、私たちの社会生活も大変な抑制を強いられました。その中で、島田学長は山梨大学医学部附属病院（以後大学病院）で、新型コロナ対策に大変ご苦労されたことと思います。今回、島田学長には山梨大学、また大学病院での感染対策に対する取り組み、PCR検査の重要性についてお伺いしながら、私ども地域経済団体としての甲府商工会議所が、これからどの様に進むべきかご教示いただきたいと思います。

島田学長　あけましておめでとうございます。進藤会頭からお話があったように、昨年は非常に大変な年でした。1月早々から新型コロナが蔓延し、大変な影響を受けたわけですが、私も大学病院の関係者も、初めは新型コロナがどのようなものかが全く見えないなか、暗中模索の状況で何とか頑張ってまいりました。その結果、我々山梨大学が国立大学の中でいち早く、また最も新型コロナ対策に尽力した大学と認められるところまできたのかなと思っています。

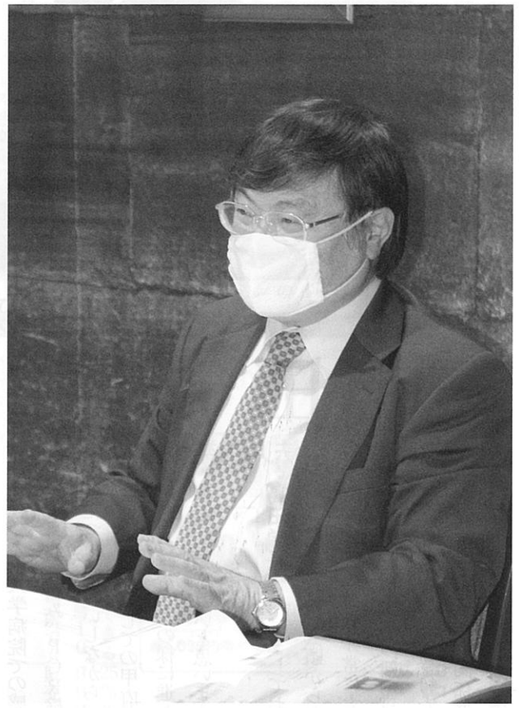
武漢の状況をテレビで見て、思い起こしたのはSARSの時の苦い思い出

進藤会頭　1月に新型コロナが中国・武漢で発生し、世界に衝撃が走ったわけですが、島田学長は医学部附属病院を抱える山梨大学学長として、また医療従事者として、どのように受け止めていらっしゃったのでしょうか。

島田学長　武漢の状況を見て、これは2002年～2003年にかけて起こった肺炎、SARSと同じだとピンときました。あの時も本当に衝撃を受けましたが、その当時、私は大学病院の感染対策委員長という立場にありました。深刻な肺炎を起こす新種の感染症であるSARSが、中国の広州、香港あたりで流行り、一般の方も医療関係者も次々と罹患し、大変な状況になっていました。日本に上陸することを念頭に、感染対策をどのように実施していけばよいのかということを色々考えさせられていました。当時、日本政府も注意喚起をしていましたが、幸い国内での感染拡大に至らず、大事にならずにすみました。一方、当大学病院は、感染症法に定めのある感染症指定医療機関に指定されていないため、山梨県と当大学病院との連携が上手くとられていない状況にあり、SARS後もその課題が活かされないままとなっておりました。

また、今度の新型コロナはSARSⅡ世だと直感しました。新型コロナはCOVID-19と呼ばれていますが、ウイルス名称はSARS-CoV-2といいます。この名前が示すように、SARSと似たウイルスが武漢を中心に発生してしまったのです。対応策が整っていない今の状態のままウイルスが山梨に入ってきてしまったら、今度こそ大混乱になると危機感を感じ、当大学病院だけでも対策を早急に立てなければならないという思いですぐに行動に移りました。

※対談日：令和2年11月11日



万が一に備えて、いち早く院内の体制を整備

進藤会頭　実際に大学病院は、どのような対策を取られてきたのですか。

島田学長　SARSの時と比べて、日本は中国や他の国々との交流が盛んになっていますので、新型コロナは絶対に日本に入ってくると予想し、すぐに患者の受け入れ態勢を整えるように指示を出しました。先ほどもお話したとおり、感染症指定医療機関ではありませんが、県内医療の中核を担う大学病院として、また前回のSARSの課題も踏まえ、感染拡大に備えて院内の体制整備を進めることとしました。

未知の感染症への対処では「隔離」が鍵を握ります。「ゾーニング」といいますが、ウイルスが存在する可能性がある危険な「レッドゾーン」と安全な「グリーンゾーン」を明確に分けて、この二つのゾーンが交差することがないように区分けすることが重要となります。幸い、当大学病院は、2013年から病院再整備事業に着手しており、新病棟に移転した際の壊す予定でいた旧病棟が休止状態にありました。新型コロナ感染専用病棟として旧病棟の設備を生き返らせることにし、すぐに設備の立ち上げに取りかかると同時に、感染症患者の受け入れの机上訓練を行うなど着々と準備をしていきました。

新型コロナ感染症患者の受け入れ

進藤会頭　島田学長が指揮をとって準備を進めるなか、県内に滞在していたバス運転手とツアーガイドが新型コロナに感染したことが明らかになるなど、日本にも上陸しました。さらに、横浜港沖に到着したダイヤモンドプリンセス号で2月5日に集団感染が判明し、山梨大学病院でも第1例目となる、新型コロナ感染症患者を受け入れられました。

島田学長　ダイヤモンドプリンセス号の患者の治療は、首都圏の病院で行われているものだと思っていましたが、実際には県内のある病院で既に受け入れていました。その病院からのSOSで、当大学病院として第1例目となる、新型コロナ感染症患者を2月19日に急遽受け入れました。旧病棟の再生は間に合わなかったので、まず急ピッチで一般病棟内にウイルスが外部に漏れないよう陰圧個室を確保、仮設の防護壁を設けるなどして受け入れ態勢を整えました。病院内のスタッフの奮闘により、何とか無事に受け入れが完了できました。

その後、厚生労働省の知り合いから陽性患者の受け入れ要請があり、これまた急いで一般病棟のうち1病棟を感染者受け入れ用に転換し、さらに6人の患者を受け入れました。

進藤会頭　その後、県内症例の第1号新型コロナ感染症患者の受け入れ、日本初の新型コロナによる髄膜炎・脳炎患者の発見、8カ月の乳児の新型コロナ感染の診断がありました。院内感染のリスクもあったのではないかと思いますが。

島田学長　新型コロナ感染症は、当初、若者は低リスクという認識がありました。しかし、20代の髄膜炎・脳炎患者の時も乳児の感染症患者の時も共通していたこととして、もしかしたらという現場のリスク感性が発揮され、迅速なPCR検査を当大学病院で実施できたということが、院内感染拡大を未然に防止することに繋がったと確信しています。

※対談日：令和2年11月11日

乳児の新型コロナ感染診断の時は、当初、感染を疑う症状はなかったのですが、胸部CT検査の画像で疑わしい影があったので、PCR検査に踏み切ったところ陽性が判明したんです。直ちに、赤ちゃんの蘇生に関わった47人もの医療者を濃厚接触者として14日間、離脱させることとなりました。その間は、県内の他の医療機関からの支援を得て、診療継続は可能となりましたが、PCR検査をせずに治療が継続されていたら、院内感染を引き起こすおそれもありましたので、PCR検査のおかげで食い止められたということですね。

進藤会頭　新型コロナによる髄膜炎・脳炎は、医学的に相当貴重な症例だったと伺っていますが。

島田学長　新型コロナによる髄膜炎・脳炎は、現在でも本当に珍しい発症事例です。何日か前に肺炎の症状があったというのが病歴に記載されていたので、救急医が処置後に念のためと患者の髄液を検体にPCR検査をしたところ、陽性という結果が出たので本当に驚きました。希少な症例であったので、世界的にも注目されることとなりました。

今解明されていることとして、このウイルスは脳、心臓、腎臓などいろんなところにいってしまうウイルスであるということです。どんな症状が出てもおかしくない。未知の感染症ですから、大学病院が本来は中心となって対処しなくてはいけません。患者さんのケアから先、病因の解明、ワクチン開発、治療法の確立というのは、大学病院の使命だと思っています。しかし、人員も資金援助も少ない国立大学病院は、肉体的、社会的、精神的な疲弊と困難を抱えているのが現状です。私は、この状況に大きな危機感を抱いています。

なぜ欧米よりも日本の感染者・死亡者数が少ないのか

進藤会頭　先ほどSARSⅡ世という話がありましたが、SARSは、東南アジアで感染者が多く発見されていました。新型コロナに関しては、その地域の感染者・死亡者数は少ないですよね。理由があるのでしょうか。

島田学長　確かに爆発的な感染拡大をしている欧米と比べてみると、東南アジアの感染者・死亡者数は少ないですよね。日本は、マスクをきちんとする、国民の衛生意識が極めて高いから感染者・死亡者数が少ないと称賛され「ジャパニーズ・ミラクル」と言われていますが、実際には、PCR検査をしていないので、患者数が少なく見えているだけなのではないでしょうか。

私は、「アジアン・ミラクル」だと考えています。コロナはウイルス性の風邪の一種で、咳が出るちょっとヒドイ風邪は、コロナの可能性があります。それの変異が、今回の新型コロナなのではないかと私は思っています。これは二つの可能性ですが、アジア地域では今回の新型ではない、別の一般的なコロナウイルスに実は知らないうちに多くの人がかかっていて、既に免疫を持っている為に免疫力が上がった状況にあり、感染拡大の抑制につながっているのではないか。ところが、欧米地域にはこのコロナウイルスは存在していなかったので、免疫0の状態にあり、一気に感染が広がっているというのが私の考えです。また、SARSにかかった地域は確かに低く抑えられていますので、SARS流行時に獲得された抗体が中和活性を発揮したということもあり得るだろうと思います。

PCR検査の必要性と今後の経済対策

進藤会頭　島田学長は、PCR検査の必要性について常々説いておられます。ワクチン、治療薬の開発が急ピッチで進んでいますが、誰もが摂取可能になる時期が定かでない現状で、これからPCR検査については、どういう対応をとっていくべきだと思いますか。

島田学長　PCR検査は、COVID-19の診断において、今でも最もスタンダードな方法としてどこの国でも実施されています。その理由は、他の検査よりもウイルス量が少なくても、迅速かつ高精度で、新型コロナを検出することが可能な検査法だからです。もちろん、検査に完璧はありませんので、本来ならば陽性の患者が陰性と判定されてしまう偽陰性という問題は、避けることができません。ですが、検査を実施しないかぎり、感染しているかどうかを見極められませんし、正確な数を把握することは不可能です。

私は、日本のPCR検査体制の増強を早い段階から訴えてきました。日本のPCR検査件数が途上国レベルの水準である以上、PCR陽性患者や死亡者の数が、実相を反映しているかは疑問だからです。37.5℃が4日間、異常な倦怠感と呼吸困難という診断基準で保健所に電話しても、PCR検査を受けさせてもらえなかった人が大勢いました。多分、山梨でも多くの方がそうだったのではないでしょうか。PCR検査をしないというのは、感染者数を正確に把握することを放棄してしまっていたということです。多くの感染者が見過ごされていたとすれば、感染症で一番大事な「隔離」が不十分となり、感染拡大に影響を及ぼしていた可能性は否定できません。保健所だけでなく、大学病院を総動員すればもっと検査を実施できたと思いますし、そういう意味で日本は、適切な対策ができていたとは評価できないですね。今からでも、感染者の正確な数を捕捉することが重要です。

進藤会頭　感染が拡大するにつれて、社会経済活動への影響は、かつて経験したことのない甚大なものとなっています。中小企業は依然として厳しい状態ですし、雇用も不安定な状況が続いています。

島田学長　日本でも経済政策に舵を切り始め、Go Toトラベルが実施されていますが、非常事態宣言の緩和後の経済活動の再開は、少し拙速に進めすぎた感があります。実際、Go Toトラベルが実施されてからというもの、感染者数はグンと伸びています。医療従事者の立場からすると、経済ファーストで感染対策はどうでも良いという政策をしているとしか思えないので、非常に残念に思っています。

進藤会頭　新規感染者数が増加した後、一旦終息したところで経済対策を積極的に打ち出すと、また増加に転じるという様に波がありますよね。しかも、波の振幅が次第に大きくなっている。これをどうやって平準化していくかということが、難しいところではありますが、感染拡大防止と社会経済活動を両立していくにはどうしたらよいでしょうか。

島田学長　アクセルとブレーキの加減が難しいですが、程度問題だと思います。今の日本は、経済活動に対するアクセルが全開で、少しやりすぎだと思うのです。新規感染者数は、北海道、大阪、東京はもちろん、全国的にみても今まで以上に急速に増加傾向にあります。そのような状態にあるのを把握していながらGo Toトラベルを止めないというのは、少し理解し難く、感染者数が増加傾向にある県は、除外・停止するなどの措置もやむを得ないのではないでしょうか。山梨も少し感染者数が増加してきていますが、当県のような医療が脆弱な地域は、患者さんが一気に増えたらパンクする危険があります。国には、PCR検査体制の拡充にもっと注力していただき、感染者数の実態をきちんと捉えたうえで、適切なタイミングで経済政策を進めて欲しいですね。

山梨大学、島田学長の近況など

進藤会頭　コロナ禍で、大学運営という面でも大変な苦労をされていらっしゃると思いますが、現在山梨大学の学生さんはどのように過ごされているのでしょうか。

島田学長　現在、当大学ではオンライン講義と従来の対面授業を併用したハイブリット授業を実施しています。大学の授業も大きな制約を受けていますが、実習が不可欠な学部の授業では、リモート授業でも実験が可能となるように工夫しながら教育の質を維持し続けていまして、文部科学省から国立大学の好事例として表彰もされました。大学を挙げて授業だけでなく、新型コロナに対応してきたことが評価に繋がったと大変喜ばしく思っています。

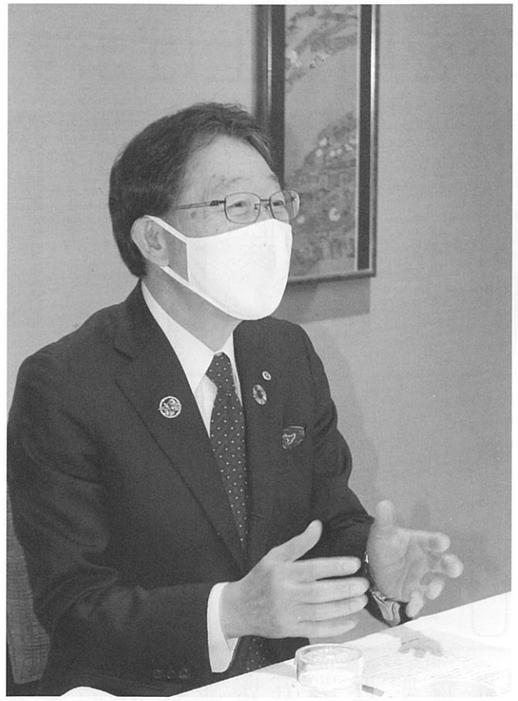
また、本学学生の生活にも新型コロナは多大な影響を与えていますが、先日、甲府商工会議所と岡島百貨店他が共同で企画されたチャリティーTシャツの収益金の一部を県内の大学、短大で組織するNPO法人「大学コンソーシアムやまなし」にご寄付いただきました。学生支援に充てさせていただいております。

進藤会頭　三密を避ける、手指消毒、マスクをするというのが新型コロナに対する対策として一般的に挙げられていますが、島田学長から見て個人の行動として拡大させないためには、何をすべきだと思われますか。

※対談日：令和2年11月11日

島田学長　全部重要ですが、感染症において有益な対処法の中で一番大事なのは、手洗いでしょうね。また普段の生活の中で、抵抗力を高めることも同じように大事です。ストレスが溜まらないように、何らかの形で発散させることは重要ですよね。

進藤会頭　うまく新型コロナと付き合っていくことが大事ということですね。最近は自宅で過ごす時間が増えてきていますが、島田学長はどのように過ごされていますか？



島田学長　好きなゴルフを我慢している以外は、通常通り過ごしています。私は、クラシック音楽が好きなのですが、当大学にはテノール歌手の片野教授、ピアニストの池山准教授という2大看板が在籍していますので、外出自粛が解除されてからは、彼らのコンサートに足を運んだりいたしました。

今年の抱負は

進藤会頭　島田学長に色々とお話を伺ってきましたが、最後に新年の抱負、また甲府商工会議所に期待することをお聞きしたいのですが。

島田学長　私が学長に就任して、今年の3月で6年の区切りとなります。全力で、山梨大学の運営に携わってきましたが、あと2年延長を決めていただきました。今年は、託された使命を実行する年かなと思っています。大学設立当時より、形を変えながら今に続いている「知の拠点」を地域の財産として未来につなぎ、改革を進めながらますます発展させていきたいと心を引き締めております。その一歩として、山梨大学は、山梨県立大学と国立と公立という大学の枠組みを超えた「一般社団法人大学アライアンスやまなし」を設立しました。これで、ますます強い地域連携が計れるのではないかと期待しているところですが、軌道にのせるために尽力していきたいと思っています。

甲府商工会議所も、前金丸会頭から進藤会頭へ引き継がれて、今年の11月で3年目を迎えられます。ご発展を期待しているところですが、新型コロナの影響で、多くの会員の皆さんが苦しんでいらっしゃることと思います。いち早く新型コロナを抑制させなければ、経済の活性化はできません。抑制については、我々が一生懸命頑張りますので、山梨県経済の持続と発展のために、進藤会頭のもと甲府商工会議所にご尽力いただきたいと願っております。

進藤会頭　私どもは、当然のこととして新型コロナの対策を講じながら、経済活動も行っていかなければなりません。しかしながら、あちらを立てればこちらが立たずというトレードオフの関係にあります。島田学長がおっしゃられたとおり、医の部分は専門の方にお任せするとして、身近なところから経済が活性化するように、事業の継続、雇用の維持・確保に全力で取り組んでいきたいと思っています。島田学長にはぜひ山梨大学の改革だけでなく、国立大学法人全体の改革にもご尽力いただき、また大学アライアンス山梨が、全国の先駆的な取り組みとして成果が上がることを期待しております。本日は、ありがとうございました。

※本対談は、令和2年11月11日に古名屋ホテルで実施されたものです。